

# 「令和3年度北陸地域麦技術セミナー」開催概要

- 開催日時：令和4年2月28日(月)14時00分～15時00分（オンライン開催）
- 参加者：約40名（生産者、生産者団体、JA、県・市町村、試験研究機関 他）
- 講師：農研機構 中日本農業研究センター 渡邊 和洋氏
- 内容
  - ・農家自らがスマートフォン等で低単収要因を分析し、圃場に合わせた単収改善に取り組むための「**診断に基づく小麦・大麦の栽培改善技術導入支援マニュアル**」を紹介
  - ・「北陸の六条大麦をめぐる事情」の説明（北陸農政局）



写真：令和3年度北陸地域麦技術セミナーの様子

## 【診断に基づく小麦・大麦の栽培改善技術導入支援マニュアル】

18項目のアンケートに  
答えてリスクを簡易診断

結果に基づいて  
対策を詳細に解説

マニュアルは  
ここから！

マニュアルの本体部分のフローチャート ①

➤ 圃場の排水性の診断の前に、ます雨以外の水の流入の有無を確認します。  
➤ 流入水や湧き水がある場合に必要対策を示しています。

（参加者A）

本マニュアルの使用にあたり、何か制約等はあるか。

（農研機構）

本マニュアルは農研機構のWEB上に公開されているものであり、制約等はない。様々な方に、積極的に活用いただきたい。

（参加者B）

小麦の場合、従来の品種に比較してパンなどに適性の高い品種は何か違いはあるか。

（農研機構）

高タンパクが求められるため、出穂期前後の遅い時期にも追肥が必要である。また、めん用品種に比べて、穂発芽が発生しやすい品種がある。

（参加者C）

大麦の収穫適期の判断はいつか。また収穫期間は刈り始めから1週間程度であるか。

（農研機構）

大麦の収穫適期は水分率が30%以下の時である。

なお、刈り遅れて水分率が20%未満に低下してくると、穂首が折れやすくなって収穫ロスが生じたり、カビ粒が発生しやすくなったりする。水分率が30%から20%に低下する日数は3~4日程度であるため、収穫適期の幅は狭い。従って、作付面積が広い場合は、圃場ごとに刈取適期を的確に判断して、成熟が早い圃場から順に収穫する必要がある。

（参加者D）

麦の不耕起播種は可能か。

（農研機構）

麦の不耕起栽培を行うと、土壌の含水率が高い状態が続きやすい。特に代掻き移植を行ったほ場では顕著で、湿害が発生しやすくなる。

したがって、排水性が悪い圃場では麦の不耕起栽培は困難であるが、排水性が良い圃場、あるいは十分に排水対策を行った圃場であれば可能である。

（参加者E）

大麦でも基肥を減らして、追肥を増やす施肥法は可能か。

（農研機構）

大麦でも追肥重点型の施肥で収量性の向上を図ることは可能であるが、精麦用の大麦ファイバースノウでは硝子粒も増えて品質面での問題が危惧される。硝子粒になりにくいもち性品種や高タンパクが求められる麦茶用の品種であれば問題ない。